

ロードで戦死した。彼は私に、「マダム（妻）、イエス（いるか） マーリンケ（子供）、イエス（いるか）」と聞いた。私はイエス、と首を縦に振った。彼は即座に、オウ、ハラショウ（よい）、ハラショウと目を細めて喜んでくれ、私に熱いスープとパンを振るまってくれた。

それから一年後、私は偶然ナホトカで彼に会った。まるで夢のようだった。彼は大きな手で私の手を握り、「トウキョウダモイ、オーチェニハラショウ！」内地帰還、本当によかったと、我がことのように祝福してくれた。

それから四十何年、もちろん彼はこの世に存在していないかも知れないが、私の心の中には、あの優しい柔らかな眼もとの彼の面差しが今もなおそのままの若さで息づいている。

二回体験したダモイ

新潟県 井口 忠三郎

終戦を知ったのが八月二十日。日本無条件降伏にて、

私どもは、南満州錦県の飛行場に終結終了。九月五日、千五百人の編成にて錦県の駅を、二段式にわかづくりした貨車に分乗して、満州鉄道ですべり出した。南から北へと縦断した。北の果てにたどり着いたのが十一月二十六日、赤い夕日が西の端に没する夕暮れどき。私どもも輸送行程六十日余り。その間、ある駅に五日、次の駅に一週間と停車を繰り返して、後方より走ってくるソ連軍が略奪した戦利物資の貨車または私どもの仲間たちの輸送車等、数多く見送りつつ最北端黒河についた。

その黒河の町は、無残にも終戦時爆撃を受けて、私どもが泊まる所は赤れんがの大きな建物だったが、屋根は落ち、星明かりが見える寒々とした廃墟だった。板塀を剝がして暖を取り、明けて二十七日、結氷せる黒龍江を、手製のそりに各人の荷物を積み、対岸のソ連領のブラゴエチンスクに入る。

同日、満鉄と同じに二段式貨車に乗せられてシベリア鉄道を走る。日本海と間違えられたバイカル湖を過ぎ、捕虜列車はどこに行くのか。走り続けること三昼夜、着いた所は炭鉱の町。寒さで身を切りさかれる思いの夜半

だった。この町の名はキロワールと教えられた。そして私どもはこの町のキロワールの炭鉱にて働くのだと言われ、翌日から作業が始まった。

ゲルマンスキーたちとともに同じ収容所にて半年間生活した。言葉は通じないけれども、意思の通いはあった。私どもの仕事は、地ト二百メートルもある斜坑を徒歩にて下がり、厚さ一・五メートルある石炭の層、長さ三十メートルはあった。番号は十九坑道と言っていた。生まれて初めて体験する石炭掘り、落盤はしないだろうかと心配と恐ろしさにて採炭の仕事にならない。私どもの採炭の班は十一人にて、ソ連の地方人が二人、この人たちは採炭夫としての大ベテランで、この人に指導を受けた。最初のうちは採炭のノルマなどできなかった。一週間、いやそれ以上の日数、このベテランのソ連人が見ているとばかりに、私どもの採炭割当を手伝ってくれた。国境を超えた人情には深々と頭が下がった。

毎日同じ仕事を繰り返し返しているうちに、なれない仕事も身についてきた。一人でノルマ達成ができるようになったので、このソ連の炭坑夫も非常に喜んでくれた。

だが、食糧不足にて日に日に仲間たちはやせ細って、収容所から炭鉱までの道程は四キロから五キロもあるが、歩哨の監視のもとでダワイ、ダワイとせきたてられて、歩くのも精いっぱいだった。

冬の夜の往復には、道路に落ちている馬鈴薯^{II}カルトシカを拾ってきては、ペイチカの上にて焼いて食ったこともたびたび。あるときなど大事に拾ってきた馬鈴薯が焼けたら、馬糞にてがっかりした事もあった。繰り返し返される毎日の仕事に私も栄養失調にてやせ細って、あちらの医師の診断をしてもらったら、休み一日、二日と毎日の診断のたびにもらい六十日も続いたが、食糧が悪いのでやせ細ってはいるけれども仕事を休んでいるので、体調は快方に向かった。が、ドクトルの診断結果、採炭作業は無理と、二年半も作業した石炭掘りと編成替えになり、地上作業になった。

鉄道の保線作業だ。この仕事が六か月だった。その保線作業もなれてきた。八月下旬ごろ、私どもにダモイの命令が来た。手を取り合って喜び合った。集結地ナホトカにダモイの命令が出て以来十日くらいにて着いた。

集結地ナホトカにて復員式を行い、輸送船に乗る当日が来た。千五百人の梯団に編成され、ナホトカ地区の所長から復員のお祝い、意義とソ連の社会主義のよいところを国に帰ったら日本の皆さんに伝えていただきたいと、うまい日本語にて話された。

式終了後、仲間の先頭からナホトカの港に待機している復員船に向かって動きだした。やがて私どもの先頭の番が来たら、途端に出口の門をびっしりと閉められたから出られない、帰られなくなってしまった。待ちに待った引揚船を目の前にしてこのありさま。残念のみな気持ち、計り知れない。

昼食の時報の合図が鳴るけれども、だれ一人として飯上げに行く者がいない。食事ものを通らない数日が続いて一週間目ごろより、私どもはどうして残されたのかと疑問と反省の聲が仲間の口より出始めた。口論の結果、民主活動に乏しいという結論だった。いま一度どこかの地区に入って勉強をさせられるのだと、うわさが口から耳にと伝わって、日が過ぎ十月に入る。

また身が凍る思いの寒さを迎える季節になった。内地

に帰られる楽しみもみながあきらめ出したのか、口になくなって来たころ、十月半ばナホトカを汽車にて出発した。どこに向かうのか、着いた所はボーインキといふ地名の場所に降ろされた。私どものやせ細った身体は、哀れとも言葉に言えない。

これからどうなるのか、直ちに集合が持たれた。二班に編成替えが始まった。町の自動車工場に行く者と、山の中に今までに日本兵が伐採した跡整理とに分けられた。私は伐採の跡整理班に編入され、五十人くらいにて、町の自動車工場に行く仲間達と別れて山の中に送り込まれた。

二十三年から二十四年にわたって冬の伐採が始まった。私どもは自分自身の身体を支えているのが精いっぱい、太い木を切り倒すなどできないが、ソ連兵の高い怒声に驚かされて大木に挑戦したが、この伐採作業には体力の衰えで、ノルマを完成することができなかった。

毎日同じ作業が続き、やがて雪解けの季節が来た。

山々の谷間を流れる小川も、今まで氷に閉ざされていた小魚が動き出したのが目に見えるようになってきた。内

地の故郷の山川が懐しく思い出された。シベリアの春の日も一日一日と暖かくなるにつれ、草木の芽も吹きはじめた。極寒の地とはいえども自然の草木は日本と変わらぬ。特にゼンマイのごときは太いものが山一面に出ていた。

また、野生のごぼう等、道路の端にたくさん見られた。作業帰りに各人採って、炊事場に運び、料理してもらったが、ゼンマイの速煮は渋くてこれには閉口した。山菜は豊富にあるのにと悔しがったが、後の祭りだった。

春も半ば過ぎると、下山して町の土木作業に狩り出された。そして徹底的に民主主義の勉強かと思われる事態が始まった。まず一キロくらい離れているアルチョの町に映画を見物に連れていかれた。題名はわからないが、ともに働きともに生産して喜び合うという画面を、時折り二、三回見た思いがした。この地区にて夏は土木作業にて明け暮れた。この地上作業にて苦しかったけれども、身体は回復しはじめた。

苦労を生き抜いた私どもも、十月に入ると二度目のダ

モイの話が来た。十月中旬、ダモイ話が事実になり、ソ連人から命令が出された。今度こそは本当に日本に帰れるのだとみな大喜びだった。あの第一回ダモイ話にて、送り返されて一年目、再度のダモイ、苦痛に耐えて生き抜いた仲間たちの喜び！

集結地に乗り込んだのは十月下旬、二度目の復員式を終わり、迎えに来た輸送船、興安丸に飛び乗り、さらばシベリアと日本海に乗り出し、夢に見た日本の国内地へと向かうとき、すでに十月二十七日、舞鶴の栈橋に上陸、故国に第一歩を踏みしめた心地、ああよかったと。

「かつて」は炭鉱の町ラーゲルの丘の上に二百八十余人の霊が眠っているのだと思うと、心が傷む。

抑留記 “戦犯収容”

栃木県 奈良 大 吉

第二次世界大戦後、目ざましい復興をし、世界一の経済大国、長寿国、そして平和と歴史は流れて四十余年。